

成人向け  
ADULT ONLY

# デメツ レイニツ デドツ レはニ です



青橋由高  
有末つかさ  
illustration

青橋商店  
AOHASHI GO NOVELS

## Story

「ご主人様、鼻の下が伸びてるわよ。  
シュンのハリで縫いつけて欲しいの？」  
ハリネズミのシュンの元を訪ねてきた黒猫を追いかけると、そこは美人三姉妹のいる洋菓子店だった。  
「メイドだけでは飽き足らずウエイトレス属性まで装備するなんてどこまで卑猥で淫乱で浅ましいご主人様なのかしら。これで我慢しておきなさい」  
ウエイトレス服を纏ってご主人様に甘いお仕置きをしたツツンメイドの前に、また別の強敵が現れる。  
「SPメイドなんてニッチな属性にまで発情するとは予想外の淫獣ね。撃つわよ？」  
可愛い犬とともに現れた金髪メイドに、ヤキモチ焼きの少女はまたも栄春を押し倒す。  
銃口を向けながら。  
「あなたは私だけを見ていればいいのよ、ご主人様♥」  
デレモードに突入しても  
やっぱりツツンメイドはツツンでした！



「ツンツンメイドはデレデレです」

青橋由高あおはし ゆたか（著）

・有末つかさありすえ（イラスト）

# 目次

|             |     |
|-------------|-----|
| プロローグ       | 5   |
| 第一章         | 6   |
| 第二章         | 68  |
| エピソード       | 118 |
| 幕間〜姉ウエイトレス編 | 137 |
| 幕間〜SPメイド編   | 141 |
| 「SPメイドの通販」  | 148 |
| 「メイド専門出版社」  | 155 |
| オリジナル版あとがき  | 158 |
| 電子版あとがき     | 159 |

## プロローグ

ある日の夜、牧尾家<sup>まきお</sup>のベランダ。

三匹の愛らしいペットたちが車座になっていた。

「んなー」

「きゅきゅ」

「わんっ」

黒猫とハリネズミとSP犬はなにやら会話をしている。

「ねえ、せっかくの夏休みなんだから、一人ともうちのお店にご主人様連れて遊びに来なさいよ。あたしがなんとかしてあげるから。にゃー」

「うん、ボクもご主人様たちとお出かけしたいよー。きゅー！」

「ボクもお散歩のときにご主人様とおねえちゃんをお店に案内してみるの！ わふ！」

そして三匹は、具体的な作戦について打ち合わせを始めた。

# 第一章

「いつまで寝てるの、えいしゆん栄春。とっとと起きないと二度と開けられないよ  
うにシュンのハリで瞼を縫いつけてやるわよ」

「きゅっ」

「ふおおおッ!? ビリっときたああああ!!」

牧尾栄春の心地よい朝の眠りを妨げたのは、剥き出しの脇腹への鋭い痛みだった。

(ぬおおおっ! なんだなんだ、この、まるでハリネズミのハリが突き刺さったような激痛はッ!?)

涙目になりながら起き上がった栄春が自分の脇腹を見ると、  
「って、思い切りハリネズミのハリが突き刺さってるうっ!」  
まさに鋭いハリがつんつんと肌を刺しているところだった。

「きゅきゅ?」

「こらシュン離れろ、痛え、マジ痛えから!」

首を傾げる仕草は実に愛らしくていいのだが、この痛みの前ではそんな余裕もない。

「いいのよシュン、そのままじっとしてて」

「押すなよ！ シュンを俺の脇腹に押しつけるなよ！」

シュンの身体をぐいぐいと押しつけて榮春に激痛を与えてる犯人は、言うまでもなく毒舌性悪幼なじみの針山桐葉だ。はりやまきりは

恋人という関係になっても基本的な性格は変わらない。

「ようやく起きたの？ もっとぐいぐいやっておく？」

「やらんでいい！ 起きた、起きたから！」

「あら残念」

「なぜそこで残念という単語が出てくるんだよ！ おかしいだろ！ そもそもお前、起きなかったら瞼云々とか言っておいて、どうしていきなり脇腹なんだよ！ まずは優しく声をかけたりしてからにしろよ！」

「私の警告が聞こえてから三秒以内に起床しなかったあなたが悪い」

「無茶言うな！」

刺された脇腹を見ると、うっすら赤くなっている。

「きゅうう」

自分が悪いと思ったのかシユンが申し訳なさそうに鳴く。

「いや、お前は悪くない。悪いのはお前の飼い主であるその悪魔だ」

「ふふふ、そうね、確かに私は小悪魔かもね」

桐葉、なぜか嬉しそうに黒髪を掻き上げる。

「勝手に『小』を付け加えるな、意味が大幅に変わる！」

「そうよね。悪いのはどう考えてもとっとと起きない栄春だものね。私はもうシャワーも浴びて朝食の準備も終えてるといふのに」

「し、しかたないだろ、ここんところ疲れてんだから」

「なに、疲れてるのは自分だけと思ってるわけ？ 言っておくけどね、セックスで疲れるのは男だけじゃないのよ。女のほうがイク回数多い分、疲労は激しいんだから」

「誰がそんな話をしてる！ 夜遅くまで勉強してるから疲れたって言うんだよ！」

栄春たちは三年生、つまり受験生だ。本番まではまだ半年以上あるが、志望校のレベルを考えると今から頑張っておく必要がある栄春は、こつこ



つと勉強に励んでいる。

「なるほど。つまり勉強で疲れてはいるものの、エッチは余裕、と。それは今夜から期待してもかまわないって解釈でいいのね？」

「あ。いや、その……ごめん、エッチでも疲れます、はい」「ちっ」

「なんでそこで舌打ちするの!？」

「そんなの決まってるでしょ。どっかの誰かさんのせいでエロエロに調教されたこのわがまま女体にもっと奉仕させようと思ったのよ」

「人聞きの悪いことを！」

「でも事実よね？ さっきシャワー浴びたときに見たら、私の全身、キスマークだらけだったわよ？」

「そ、それは悪かった」

「別に責めてないわ。むしろキス程度じゃなくて噛んだり引っ掻いたりスパンキングしてもらいたいくらいよ」

「朝っぱらからエロトーク全開だなお前！」

「私はコンビニ以上に年中無休で常時エロスよ」

桐葉もう一度髪をばさりと掻き上げ、威風堂々と宣言する。無駄に漢らしい。

「言い切りやがった！　なんかカッコイイ！」

「惚れた？」

「元々惚れとる！」

「……」

「な、なんだよ、いきなり黙ったりして。恥ずかしくなるだろ」

「まったく……あなたはときどき、そういうことやらかすから油断ならないのよね。どうしてくれるのよ。せっかくシャワー浴びたのに、また発情しちゃったじゃない」

桐葉は着ていたシャツとスカート（さすがにメイド服ではない）を素早く脱ぎ捨てると、下着だけの姿になってベッドに飛びこんで来た。

「お、おいっ」

「私を発情させた責任をとりなさい、ご主人様」

なにか言い返す前にキスで唇を塞がれ、同時に朝勃ちしていた愚息をにぎにぎさわさわしこしこされては、拒絶という選択肢は栄春の中から消滅

する。

(ええいつ、かかってこいやあ！)

昨晚、汗だくになって絡み合ったベッドに転がり、朝っぱらから淫らな行為に耽るバカップルを、

「きゅうう」

ハリネズミのシュンが「ボクだけ仲間外れ？」とでも言いたげな顔で見つめていた。

夏休みに入るとすぐに栄春の両親はまた仕事で家を空けた。それと入れ替わりに桐葉がやって来て、栄春の面倒をあれこれ見てくれている。

来年には二人とも受験が迫っているから基本的には勉強がメインだが、なにしろ若くて健康でエロエロでデレデレなカップルなので、今朝のように肉欲に溺れることも少なくない。というか多い。

「まったく、朝から私のオマ×コに精子注ぐだなんて、とんだ絶倫ご主人様なこと」

すっかり遅くなった朝食を口にしながら、桐葉がやれやれと肩をすくめる。

栄春にとって残念なことに、あの露出過多のエプロンドレスは今回出番がない。先日着用したところ、一回り成長してしまった桐葉の巨乳に耐えきれず胸の部分が破損してしまい、現在修復中なのだ。

「あれはお前のほうから誘ったんじゃないか」

「メイドに文句をつけるだなんて、何様のつもり？ ご主人様のつもりなの、まさか？」

「……どこから突っこめばいいものやら」

「膣でも肛門でも口でもどこでもいいけれど」

「予想してたけど、それでもお前のボケは酷すぎる！」

「オマ×コでもアナルでも口マ×コでもいいけれど」

「言い直してさらに悪化してるじゃねーか！」

「負のスパイラルというやつね」

「全然違う！」

桐葉との会話はどこかでブレーキをかけなければエンドレスになる。そ

して、ブレーキ役はほとんどの場合、栄春の担当だ。使い過ぎでブレーキの摩耗が激しい。

「わかったわかった、エロいのは俺だ、俺が悪かった」

「わかればいいのよ、エロ春」

「くっ……人が話を切り替えようとしてるのに、どうしてお前はいちいち俺の神経逆撫でするような言い方すんだよ」

「裏筋をなでなで？」

「……ごっそさん」

もう下ネタには反応しないぞ、という意味表示も兼ね、食べ終わった食器を持って台所へと持って行く。

「なによ、つまらない男ね。もぎゅもぎゅ。ちよつと際どいトークを軽やかにこなさないと、女を口説けないわよ？……ごっくん」

桐葉も空の食器を持ってついてくる。栄春を追うために残っていたご飯を一気に詰めこんだらしい。

「飯は落ち着いて食えよ」

「もう食べ終えたわ。ごっくんは得意なの」

「……」

ここで反応しては負けだと自分に言い聞かせ、食器をシンクに置くと言のままリビングへと戻る。

「ごっくんは得意なの」

「繰り返さなくてもいい!」

はあ、と大きく息を吐き、この下ネタ大好き幼なじみを見る。

(なんでこいつ、見た目はこんなな美人なのに、性格がこんななのかなあ)

「なに、じっと私を視姦して。ごっくんしてもらいたくなかった?」

「本当にしつっこいな、お前。……で、さっきの話だけだな、いいのか?」

「なにが?」

「軽やかにエロトーク駆使して女を口説いても」

「ああ、いいわよ。むしろ歓迎」

「え、いいの? この浮気者、とか言わないの?」

嫉妬してもらえないのはちょっと寂しいな、と思ったのも束の間、

「だって口説くのは私でしょ？」

「は？」

予想外の反応が返ってきた。

「え？　もしかしてあなた、私以外の牝を口説くつもりだったの？」

「牝とか言うなよっ」

「だって栄春にとつての女って、私以外あり得ないでしょ？」

「どっからその自信が来るんだよ」

「まさかとは思うけれど、私以外の牝を口説く予定があるわけ？」

桐葉の瞳がずっと細められ、同時に、横で丸まっていたシユンに手が伸びる。この場合のシユンはペットではなく、凶器と考えるのが正しい。

「いやいやいや、そうじゃない、そうじゃない！　取り敢えずシユンを置け、怖いから！」

「ダメ。他の女を口説くと宣言したクズ男なんて信用できない」

「宣言してねえ！　俺にはお前しかいねえってば！　俺みたいな男を相手にしてくれる物好きなんて桐葉以外にいるわきゃねえだろ!？」

「……それもそうね。栄春みたいな性欲しか取り柄がない男を好きになる

手遅れ女、私くらいなものだものね」

納得してくれたのか、シュンをそっと自分の頭に乗せる。桐葉の頭の上がお気に入りか、嬉しそうに「きゅきゅっ」と鳴く。

「自分で手遅れ女とか言うなよ……」

「事実だもの。でも別にいいの、あなたを好きになって後悔したことなんて一度もないから」

真顔でこんなセリフを吐いてくるのが、桐葉という女の恐ろしいところだ。

「ただし、あなたが私を好きになって後悔することは山ほどあるとは思わね」

栄春も桐葉も受験生であるからして、当然、一日中こんなバカな会話をしているわけではない。基本的には勉強が中心のスケジュールだ。

ただし二人とも模試では志望校の合格ラインに達している（栄春はボーダーラインぎりぎりだが）ため、それほど長時間の受験勉強はしていない。



午前と夜以外は自由時間も多くとってあった。

もっとも、夏のこの時期の昼間に外出するのは厳しいので、もっぱら家の中でゲームをしたり映画を観たり読書したり、ということが多い。

最近の二人のブームはミステリで、犯人やトリックを推理して、より正解に近い方が勝ち、というルールで競い合っていた。

「今日こそ勝つ！ 連敗を止める！ イメトレのために某少年探偵のコミック読み返してきたぜ！」

「そうね、あなたは『見た目は大人、頭脳は子供』だものね」

「言うと思ったけど！ 言われると思ったけど！」

「その点、私は『昼は淑女、夜は娼婦』よ」

「探偵関係ねえ！」

そんな緩い会話をしていたとき、ふと、シュンの姿がないことに栄春は気づいた。

「なあ、シュン、どこ行った？ さっきまでいたよな？」

「またあの黒猫が来てたから、一緒に遊んでるんじゃない？」

ここ最近、栄春や桐葉の自宅近辺に綺麗な毛並みの黒猫が頻繁に現れて

いた。

どこかの飼い猫らしいが、ハリネズミのシュンと仲がいいらしく、たまに一緒にいるところを栄春たちも目撃している。

どれどれ、と庭に出てみると、日陰で並んで座っているシュンと黒猫の姿があった。黒猫は人に慣れてるようで、栄春と桐葉が近づいても逃げたりせず、逆に擦り寄ってくる。

「人懐こいわね、この子」

桐葉が猫を抱き抱え、首の下を指で撫で始める。

「どこの猫かなあ」

首輪を見てみると、電話番号と住所が書かれていた。ここからそれほど遠くはない。

「ここらへんはあまり行ったことないわね。駅の向こう側の住宅街かしら。……あっ」

桐葉の腕の中からするりと抜け出た黒猫が、しなやかな動きで塀の上に飛び乗る。そしてこちらを振り向き、ゆっくりと歩き出す。

「まるで、ついてこいって言うてみたいだな」

「きゅ、きゅきゅっ！」

「……シユンも行きたがってるようだし、散歩がてら、この猫について試してみる？ 安楽椅子探偵もいけれど、たまには刑事のように足を使うのも面白そうだしね。どこかの誰かさんは三本目の足ばかり使ってるし」

「だからそういうこと言うのやめろっての」  
こうして、臨時の黒猫尾行が始まった。

「なんだか楽しいな、こういうのも」

「そうね。これでもうちよっと涼しければ文句はないんだけど。曇りなのにこの暑さ、勘弁して欲しいわ」

黒猫の尾行そのものは、拍子抜けするくらいに楽だった。

「この子、私たちがついてきてるの確認してくれてるみたいよね」

人間が歩けるような道をゆっくり進むので、見失う心配もない。栄春たちはただ、猫に続いていけばいいだけだった。

問題は、じっとりと肌に絡みつくような蒸し暑さで、歩き始めて数分で二人とも汗だくになっていた。

「きゅうう」

桐葉の頭に乗ったシュンもどこかぐったりしている。

「この猫の家を見つけたら、取り敢えずどこか涼しいところに入ろうぜ。シュンが辛そうだ」

「異論はないわ。でもこの辺りは住宅地だし、喫茶店とかあるかしら」

「この際コンビニでもいいけどな。……おっと、首輪に書いてあった住所、こちらへんじゃないか？」

電柱に書かれた住所表記を見ていた栄春が足を止めると同時に、数メートル先を優雅に歩いていた黒猫も歩みを止めた。

「あれ、もしかしてこの子、ここの飼い猫なの？」

桐葉の言う「ここ」とは、住宅地に溶けこむようにひっそりと構えられた小さな洋菓子店だった。店の奥にはイーテインのスペースもあるようだ。桐葉の疑問に答えるかのように、黒猫はすたすたと自動ドアの前に立つと、慣れた様子で店内へと入っていく。開いたドアから溢れたひんやり冷

たい空気が心地よい。

「どうやらそうみたいだな。せっかくだし、俺らも中に入って涼もうぜ」  
「賛成。……でも、シュンも連れて行って平気かしら？」

シュンも一緒に入ってもいいのかと桐葉が逡巡したそのとき、店の中からあどけない顔をしたウェイターがやって来た。その足下に体を擦り寄せているのはあの黒猫だ。やはりこの店の飼い猫だったらしい。

「大丈夫ですよ。うちはペット同伴可のお店ですから。是非、一緒に」  
「沖おき 啓司けいじ」と書かれたネームプレートをつけたウェイターの言葉に、栄春たちは店内へと足を踏み入れた。

入口から見ると小さく見えたが、奥行きがあるためか、入ってみると狭いとは感じさせない店だった。席数こそ少ないがゆったりできるイーティンスペースもあり、なかなかいい感じだと栄春は思った。

「へえ、ここ、よさそうじゃない」

桐葉も同じ感想らしく、機嫌良さそうにメニューを開いている。

「ご注文はお決まりでしょうか」

先程のウェイターがやって来たので、オススメはなにかと聞いてみる。  
「好き嫌いがなかったのでしたら、どれを食べても美味しいですよ。オススメです」

自分たちと同じくらい歳の年齢に見えるウェイターがにっこり笑いながら答える。営業スマイルには思えないので、本心からのセリフらしい。

「じゃあ、俺はチーズケーキセット」

栄春はケーキと飲み物のセットメニューを頼むが、

「私はモンブランセットに、エクレアと……あ、この、シェフオススメの特製プリンもお願いします」

桐葉はそれに加えて単品メニューを二つ追加する。

「よく食うな、お前」

「女の子には甘いもの専用の胃が別にあるのよ」

「牛みたいだ」

「うるさいわね、だって全部美味しそうだったんだもの」

「その点に関しては同意するが、でもさあ、甘いものって量は食べられな

いだろ？」

「そう？ 私は平気よ。……ああ、そうだ、次の『ゲーム』は甘いもの大食い競争ってのはどう？」

栄春と桐葉が子供の頃から繰り広げているこの勝負は、例の「メイドゲーム」が終わったのちも変わらず続行中だ。直近のゲーム（ミステリの推理合戦とは別だ）では栄春が勝っているため、次の題材を決める権利は桐葉にある。

「……それ、やる前から俺の負けが見えてるんだが」

栄春も甘い物は好きだが、量は食べられない。

「じゃあ決まりね。もちろん負けたほうが代金も払うってことで」

「ひでえ！」

文句を言ったそのとき、

「お待たせしました」

と、注文の品が運ばれてきた。

「あ」

栄春が思わず声を出したのは、ケーキを持ってきたのがさっきの少年で

はなく可愛らしい制服を纏ったウエイトレスだった、からではない。ウエイトレスの頭の上にあの黒猫が乗っているのを見たためだ。

「あなたの飼い猫なんですか？ 可愛い猫ですね」

「はい。クロって名前なんです」

ネームプレートを見ると「沖泉いづみ」と書いてある。先程のウエイターの姉、もしくは妹だろうか。

「この店の招き猫で、この子をお目当てに来てくれるお客様もいらっしゃるんです」

「じゃあ」

自分の話をしているとわかったのか、クロがどこか自慢げに鳴く。

「実は私たちもそうなの。その子がよくうちに来て、どこの猫だろうと追ってきたらここに着いたってわけで」

桐葉も会話に加わるが、ナチュラルに牧尾家を「うち」と言っているところが栄春にはちょっと嬉しい。

「そうなんですか？」

「多分、うちの子に会いに来てるようなの。ね、シュン」



「きゅっ！」

それまで膝の上で大人しくしていたシュンが勢いよく桐葉の身体をよじ登り、頭の上に乗る。

「なー」

「きゅきゅ」

クロとシュンが会話をするように同時に鳴くのを見て、ウエイトレスが少し驚いたように自分の飼った猫を見た。

「クロ、あなた、いつのまにこんなお友達をつくったんです？」

「なああ」

「きゅうう」

黒猫とハリネズミのその声は、

「秘密よ」

「ねー」

とでも言ってるように栄春には思えるのだった。

(これも、デートって言っていていいわよね)

並べられたスイーツを前に、桐葉はふとそんなことを考えた。

向い側でチーズケーキを美味しそうに食べている幼なじみとはもう互いの親も認める仲だが、恋人同士になるまでかなり遠回りをしたため、いわゆる普通のデートの回数は少ない。

ただの幼なじみという関係のときには数え切れないほど一緒にあちこち外出したものの(桐葉の中ではあれらもデートとしてカウントしているが)、恋人になってからはまだ日が浅いため、二人でどこかに遊びに行っただことはほとんどない。

受験生だから、という理由もちろんある。

(ま、私は栄春が側にいるなら別に家の中でもお風呂の中でも布団の中でもないんだけど)

そうは思う一方で、やはりせっかく恋人同士になったのだから世間一般で言うところの普通のデートもしてみたいと思うくらいには、桐葉も乙女であった。

「あれ、食べないのか？」

フォークを持ったまま動かなくなった桐葉に、栄春が声をかけてくる。

「言われなくとも食べるわ。欲しがってもあげないわよ」

「別に狙ってないから安心してゆっくり食べる」

「ただ、どうしても食べたいとほざくのならば、一口くらい恵んであげるくらいの慈悲の心を私は持ち合わせてるわ」

「いや、だから俺は自分のがあるからいいって」

「黙りなさい。一口恵んであげるって言ってんだから、素直に尻尾振ってひもじそうにねだればいいのよ」

「どうしてそこで怒られなきゃならんの俺!？」

桐葉に睨まれた栄春が困惑の表情を浮かべる。

(察しの悪い男ね。私が「あーん」してあげるって言うてるのに、どうしてわからないのかしら。ホント、女心に鈍いんだから。あとでお仕置き決定ね)

この状況でそれを察しろというのが無茶とわからないのが桐葉という少女である。

「いいからねだりなさい。憐れで惨めで情けない感じで私にケーキを恵ん

てくださいと懇願するのよ、栄春」

それでもさすがに人生の大半をとくに過ごしてきた少年はなんとなくこちらの意図を察してくれたらしく、途端に頬を赤くし、きよろきよろと周囲を見回し始める。

（ふふ、ちゃんとわかったようね。でもそんなふうには挙動不審な態度していると、逆に他のお客さんの注目浴びちゃうわよ？ 私は全然気にしないけれど。むしろ見せつけたいけれど。真っ赤になりながら私の唾液が付着したフォークからケーキをあーんされる情けないあなたの痴態を見てハアハアしちゃうつもりだけど）

ここまで来たらあとは実行あるのみと、桐葉はまずモンブランを一口食べ、

「美味しいわ」

と言ってから（これは本当に美味だったので演技ではない）、二口目を乗せたフォークを栄春へと差し出した。

「さ、わんと鳴きなさい、ポチ」

「誰がポチかっ！」

「鳴かない限り食べさせてあげないわよ」

もはや「あーん」攻撃をキャンセルさせる手段はなく、被害を最小限に留めるためには桐葉の要求を呑むしかないと（悲しいことに）熟知してる少年の決断と行動は早かった。

「わ、わんっ」

「ふふ、いいわよ、お食べポチ。あーん」

極上の微笑を浮かべた桐葉に対し、

「くう……はぐっ」

栄春の顔は羞恥で真っ赤に染まっている。

「どう、美味しいでしょ？ 私の唾液というおまけもついてるしね」

そんな恋人の姿を堪能しつつ、さらに追撃も忘れない。

（うふふ、ホントにいい反応をするわね、栄春ったら。新学期になったらまたお弁当であーんしてあげようかしら）

ただ一つだけ桐葉の計算外だったのは、店内の注目は自分たちには集まらなかったことだった。

（まあ、あっちのほうがいいものねえ）

内心で苦笑した桐葉の視線の先には、店の入口前でなにやらじゃれ合っているシュンとクロがいた。店内の人間はみなあの二匹の愛らしい姿に釘付けで、誰もこっちのバカップルなど見てはいなかったのだ。

「シュン、楽しそうね」

「ああ、そうだな……って、冷静に考えたらシュンってネズミの仲間だろ？ 猫とは仲が悪いんじゃないか？」

「名前はネズミってなってるけど、モグラに近いんじゃないか？ かしら？」

「ああ、そーいやそーうか」

「それにあの子たち見てると、そんなの気にならないくらい仲良しだもの」

「……確かに」

ハリネズミと黒猫という珍しい組み合わせに加え、楽しそうに遊んでる二匹の姿は目を惹くのか、少なくとも通行人が足を止めていく。そのうちの数名が入店したので、客引き係としては貢献しているようだ。

「しかし、シュンだったらいつの間にあんな可愛いガールフレンド引っ掛

けたのかしらね」

「え、あの黒猫、牝？」

「そうよ。気づかなかったの？」

「気づかなかったっていうか、気にしてなかった」

「私は動物を見たらまず性別をチェックするわ。人間も含めて」

「うん、お前らしい」

妙に納得顔の栄春を半目で睨みながら、

「なにしろ、私の恋人は牝であれば無機物にも欲情しかねない全身これ性欲の淫獣だから大変なのよ」

「無機物ってなんだよ！ あと淫獣とか言うな、現役女子学生！」

「あら、ごめんなさい。確かにあなたなら無機物相手でも確実に発情できるものね」

「謝罪のポイントがずれすぎている！ 意図的な誤爆はただの虐殺だ！」

「重ねて謝るわ。牝でなくともイケるようにレベルアップしたのよね。男の娘とか」

「そ、そっちの趣味はないわ！」

「でも今、一瞬狼狽えた」

「ちち、違う！ あくまでも二次元限定で、ちょっとだけ、ごくごく稀に、『これはこれでアリの世界かもな』と感じた一瞬が過去になかったとは言えないかもしれないという極めてミクロ的な観点からの躊躇であって、お前が疑うような路線に俺は足を踏みこんでないっ」

「……あなたって、自分から墓穴掘るタイプよね」

「誤解だっの！」

「わかってるわ。栄春の趣味嗜好性癖くらいすべてチェックしてるもの」

その点だけは断言できる。現在ののような関係になってからも、桐葉は栄春のエログッズ調査は一切緩めていないのだから。

「それはそれで複雑な気分なのだが」

「あと、栄春って墓穴だけじゃなくしておケツも掘るわよね。具体的には私の後ろの淫らな穴を」

「やめろ、公共の面前だッ」

無論、自分たちの会話を聞いている人間が周囲にいないことをさりげなく確認してあるからこそそのきわどい発言である。



(あー、栄春からかうのって楽しいわ)

自分の言葉でころころ表情を変える幼なじみを見てると本当に飽きない。  
(まったく、最高の恋人だわ、あなたは)

プリンをスプーンで口に含みながら、桐葉は心の中で呟いた。

「まったく、最低の浮気者だわ、あなたは」

シュンの追跡から始まったケーキデートの一週間後の夜、栄春は自室の真ん中で正坐をさせられていた。

(な、なんで俺、いびられてんの?)

目の前には仁王立ちした桐葉の魅惑的な絶対領域があるのだが、さすがにそれを堪能する余裕は(それほどは)なかった。

「お、おい桐葉」

「なに、この万年発情コンビニエンス淫魔ご主人様」

ぎろり、と見下ろされる。

「ふ、二つ疑問があるんだが、いいか……よろしいでしょうか」

「言ってみなさい」

「ひ、一つ目は、どうしていきなりメイドさんになったかってことなんだが……なんでございますが」

「どんだん言葉遣いが卑屈になっていくのは、それだけ桐葉の視線が冷たかったせいだ。」

「別に。気分よ、気分。まあ、あなたが誰のご主人様であるか、たまには思い出させてあげようとかって考えもなくはないわね。メイド服の壊れた部分の修繕も終わったことだし。……で、一つ目は？」

「俺、お前に……メイド様に浮気者と叱られるような心当たりがないんでございますが。その点、もしかしたらなにかの勘違いではないでしょうか」

「栄春がびくついている要因の一つは、桐葉の頭の上に乗っているシュンの存在だ。」

「（こ、こいつ、本気で怒ったらマジでシュンのハリをぶっ刺してくるからな……っ）」

「あれは痛いのだ。本当に、心の底から痛いのだ。」

「ふーん。つまりご主人様はこう言いたいわけね？　自分は無実だと。まったく思い当たるふしがないと？」

「え、ええと……まあ、そうでげす。えへへ」

「じゃあ、特別にヒント。……『PK』」

「へ？　『PK』？」

栄春が「え？」という反応を見せたのは、桐葉の発した単語の意味がわからなかったからではない。なぜここでその名が出てくるのか、という意味での疑問だった。

「PK」とはシュンのおかげで開拓できた例の洋菓子店の名前で、その後、栄春と桐葉のお気に入りの一軒となっている。

今日も二人（と一匹）で店に寄り、買ってきたケーキを夕食後にデザートで平らげたばかりだ。

（ケーキ一緒に食ってたときはいつもと様子一緒だったはずなんだが……）

この幼なじみは普通とは違う箇所で怒りのスイッチが入ったりするので、その原因を特定するのは容易ではない。しかもあとでその理由を聞かされ

ても、

「そりゃねーよ！」

みたいなものも多く、怒られる側としたら非常に迷惑な相手なのだ。

とは言え、今は全力で桐葉の逆鱗がなんだったのかを急いで探る必要がある。このままではシュンのハリによる拷問が待っているのだから。

（ええと、桐葉がいきなり着替えたのは、ケーキ食い終わってすぐ、だったよな。ってことは、そのときに俺がなんかやらかしちまったわけか）

目を閉じ、今から二十分前の出来事を脳内で再生してみる。

……

……

……………（エロゲ的時間経過の表現）

「も、もしかしてあれか、あれなのか!？」

「ふん、ようやく己の不貞っぷりを思い出したようね」

「いやいやいや、なんであれで怒るのお前!？」

ケーキを食べ終えたあと、何の気なしに栄春はこの日初めて「PK」で目撃した沖姉弟の次女を話題に出したのだ。

あの洋菓子店には黒猫のクロの他にも、美人揃いと評判の三姉妹がいる（最初に会ったウエイターは彼女たちの弟だった）。

長女が店のオーナー兼パティシエールで、クロの飼い主が三女。

弟も含めてこの三人とは何度か店で会って話もしたりしたのだが、次女を見たことはなかった。

「俺はケーキから店のことを連想して、そういや今日、初めてあの姉弟の次女を見たな、って言ったただけじゃんかよ！」

「ご主人様のその言葉の裏には、『さすが三姉妹の中でも一番と評判の次女、たまんねえぜ』って下衆な響きが含まれてたのは明らかだわ」

「なにが明らかだよ！ 思ってたねえよ！ 初めて見た人に対して俺、どんだけ最悪なんだよ!? ショックだよ、さすがに本気で落ちこむよ!？」

「でも美人だと思ったでしょ？」

「それは……まあ、否定はしない」

女子大生の次女は子供の頃から活躍してるというモデルで、ミスキャンパスでもあるという。確かにウエイトレス姿の次女からは他とは違うオーラを感じたし、普通に美人だとは思ったものの、それだけだ。

(美人ならこいつで見慣れてるしな)

「はい、有罪確定」

「なんでよ!? 美人を美人って言っちゃいけないのか!? だったら俺は  
前も褒められなくなるぞ!」

「……あなたはこういうとき、さらりとそんなセリフを吐くからずるいのよ」

「美人を美人と言うのは男として、漢として、牡としての正義だ!」

「やだ、ご主人様、無駄にカッコイイ」

「だろ?」

「でも有罪は覆らないわ。ギルティ」

「なぜに!」

「私が怒ってるのは、あのモデルさんを褒めたあとのあなたのセリフよ」

「え……俺、他になんか言ったか?」

もう一度目を瞑り、記憶を呼び起こす。

「ええと……『メイドもいいけど、ウエイトレスもいいなあ』?」

「なんだ、わかってるじゃないの」

「え、これ、これが原因なのかよっ」

ここでようやく栄春は桐葉の不機嫌の理由を悟った。

「当然でしょ。私はあなたがギブアップしない限りはメイドなの。実質永久就職なの。売約済みなの。人妻メイドと称しても過言ではないわ」

「いやいや、さすがにそれは過言じゃ……」

「うるさい黙りなさいエロ春」

「……はい」

「つまり私の身分は一生メイドなのよ。身も心も人生もメイドに捧げたわけ」

ツッコミ所満載だったが、桐葉の目が怖かったので、我が身可愛さに栄春はぐっとセリフを呑みこむ。呑みこむが、

「そんなメイドクイーンたる私の目の前で、ご主人様自らが『メイドなんてもう古い、時代はウェイトレスだ』などとほざかれたんだから、殺意抱いても当然よね？」

「いやいやいや！」

これ以上のツッコミを我慢するのはもう無理だった。

「いつからお前メイドクイーンなんてもんになった！ そんな単語自体初耳だ！ あと、俺はメイドが古いなんて言ってるねえ！ 勝手な捏造発言でさくつと殺意抱くんじゃねえ！」

怒濤の連続ツッコミで反撃を開始。

「なんだ、お前は適当にでっち上げた発言で俺を正坐させて弾劾したってのか!？」

「……」

風向きが悪くなった途端、それまでの立て板に水を流すようだった桐葉の口が閉ざされる。しかし横を向いたその表情にはまったく反省の色はない。

「おいこらその美人メイド、なんとか言え」

「……この状況でさりと私を褒める意図が不明よ」

そう言いつつも頬が若干緩んでるので、嬉しいらしい。

「中身はともかく、見た目は最高だからな、お前は」

「なに、捨てる気？ 見た目が一緒ならウエイトレスのほうがいいってわけ？ 言っておくけれど、私、あなたからぼろぞうきんのように捨てられ



でも離れないわよ。一生野良メイドとしてついていくから」

今度は唇を軽く突き出し、そんなことを言ってくる。ようやく本音が出てきたようだ。

「……あー」

「なによ、その顔は。腹立つわね。怪しい菓飲ませて前後不覚になったところで婚姻届にサインさせるわよ?」

「いや、別にそれはもうその予定でいるから別にかまわんが……よーするに、だ。お前、ウエイトレスにヤキモチ焼いてるってわけか」

「そうとも言うわね」

「うわ、あっさり認めやがったよこいつ!」

「なに、不満? ツンデレ風に言っただけじゃ欲しかった? べ、別にアンタがウエイトレスに見惚れてたからって、全然気にしないんだからねっ!……み  
たいな?」

「棒読みされても萌えないんだが」

「本気で演技してみる? ベッドの上みたいに」

「演技してたの!? されてたの!? 俺、下手だったの!」

この問題発言に栄春、本気で狼狽える。

「毎日大変よ、ご主人様のせいで私、アへりまくりで、このままじゃ淫乱すぎて捨てられそうだから、必死に感じてない演技してるのよ」

「……」

「なに、その微妙な顔は」

「本気なのか冗談なのか判断つかなくて悩んでるんだ」

「結構本気」

「マジ？」

「マジ。正直、肉欲に溺れまくってて自分が怖いくらい」

桐葉の表情を見ると、どうも本当のことらしい。

「いいじゃん、演技なんかしないで。俺、感じまくってるお前、エロくて好きだぞ？」

「そこは嘘でも綺麗だ、とか言うものじゃないかしら」

文句を言いつつもメイド少女の顔に笑みが浮かぶ。

（ふう。ようやく機嫌直ったかな）

結局のところ、栄春がウェイトレスを褒めたのが原因によるヤキモチだ

ったようだ。

(普通にヤキモチ焼いてくれれば可愛いものになあ。なんですぐに凶暴化するんだ、このメイドは)

もっとも、そういう性格の相手に惚れてしまった以上、諦めるほかはない。

「それでご主人様は、あの店の三姉妹、誰が好みなのよ」

「え。まだその話続けるの？　ってか、より踏みこんだ内容になってね？」

「ただの市場調査よ。あなたの牝に対する動向は常時監視しておくのも、おばさまとの契約に入ってるから」

「お前、俺の母さんとどんな契約交わしてんの!?　いくら金が動いてんの!?!」

「金銭は必要経費に毛が生えた程度よ。その代わり、息子の人生は遠慮なくいただいたけれど」

「息子って俺じゃん！　俺の人生売約済みっ？」

「安心して。ご主人様がよぼよぼになってもちゃんとオムツ替えてあげる

から」

「喜んでいいのかどうか微妙すぎて反応に困るっ！」

「なんだったら今からオムツプレイで予行練習しておく？」

「やめて！ 俺はまだそこまでのレベルに、高みに到達してない！」

「大丈夫、私は平気だから。安心してちょうだい」

「誰もお前の話をしていない！」

「私とあなたは一心同体なのだからかまわないわ」

「かまうわ！」

またいつものように話が直角に折れ曲がり本筋をどんどんぶちぎっていくので、栄春は慌てて軌道修正を試みる。

「よ、要するに、だ。誤解はもうなくなったって結論でいいんだよな？」

俺、正坐を解いていいんだよな？」

ずっと正坐を強要されてたため、栄春の足はもう限界だった。

「そうね。じゃあ最後に一つだけ質問に答えたら、許してあげるわ」

元はと言えば桐葉の勝手な思いこみから始まった説教タイムだったにもかかわらず、それでも変わらぬの上から目線である。精神的にも物理的に

も。

「質問？」

「メイドとウエイトレス、どっちが好きなの？」

「どっちも好きだ！」

脊髄反射で答えてしまうが、慌てて付け加えることも忘れない。

「だが、メイドは俺の中で殿堂入りしてる、否、俺の一部だ！ 同じ好きでもランクが違う！」

このセリフに桐葉は満足げに頷く。

「そう。わかっているならいいわ。あともう一つ質問」

「さっき一つだけって言ったばかりじゃん！」

「あの三姉妹で誰が好きなのよ、結局」

「ええー？ まだそれ引っ張るのかよ」

好みと言われても、店でちょっとした会話をした程度でどう答えればいいのかと榮春は悩む。次女に至っては今日、初めて見かけたただけだ。

「全員美人だから悩むのはわかるけど、とっとと答えなさいダメご主人様」

「いやいや、美人はお前で見慣れてるから特には心動かないぜ？　そもそもあの姉妹、恋人いるっぽいし。なんとなく、だけど」

「その点に関しては同意するわ。……じゃああなたは、寝取るつもりであの人たちを視姦してたのね？」

「だーかーらー！　なんでお前はすぐそういう方面に話を持ってくんだよ！　違うよ、ウエイトレス服可愛いなあって思ってたただけだよ！　桐葉が着たらもっと似合うしエロいし可愛いなって思ってたんだよ！」

いい加減足の痺れが限界突破してたので、半ば叫ぶように言ってやる。  
「……そう。ならいいわ。おすわりやめていいわよ、ポチ」

「誰がポチだおい！」

文句を言いながら、正坐を崩す。

（うおおお、びんびん来てる、痺れてるっ！　まずい、こりゃ絶対狙われる、あの桐葉が痺れた足をスルーするはずがない……!）

守らなければ。あの無慈悲な悪魔に痺れた足をぐりぐり蹴られる事態は避けなければ……と身構えた栄春だったが、

「へ？　き、桐葉、どこ行くんだ？」

「ちょっと待ってなさい」

桐葉はそう言い残して部屋を出て行った。

「え？ 嘘。あの桐葉が、俺の痺れた足になんのちよっかいも出さずにいなくなるなんて……ありえん……怖い、なんか企んでそうで逆に怖い……！」

（ふふん、やっぱりメイドが一番なのよね。それってつまり、私が一番ってことと同義よね！）

栄春の部屋を出た直後、桐葉は必死に維持していた表情筋を緩めた。途端にその整った顔に笑みが浮かび上がる。

（わかってたけど！ もちろんわかってたけれど！）

栄春の気持ちの本気で疑っていたわけではないが、それでも不安になるくらいに今日「PK」で見かけた次女は美人だったのだ。

（お姉さんも妹さんも綺麗で可愛いけれど……やっぱり人気モデルは違うわね。スタイルも抜群だし。その上あんなエロ可愛い制服着られたら、女

の私だっでどきどきしちゃうくらいよ)

顔見知りになった常連客(近所に住む主婦)曰く、

「この店には三つの売りがあるの。一つ目はケーキの味。二つ目はクロちゃん。そして三つ目があるウエイトレスさんよ」

とのことだが、納得する他はない。

桐葉はよく自分で美少女だなんだと口では言っているが、それはあくまでも栄春の前でだけだ。本音を言えば、栄春に捨てられる恐怖は常に心の端に引っかかっている。

無論、こんな自分を好きと言ってくれた栄春を信じてもいるし、基本的には樂觀視してるのだが、それでも今日みたいなこと、すなわち己よりずっと魅力的な女性が現れると黒い感情がむくむくと生じてしまう。

(まあ、あのエロ魔神のことだから、これ使えば一発で陥落できるだろうけれど)

自宅からこっそり持ちこんでいた秘密兵器を取り出し、桐葉は一人口元に笑みを浮かべる。

「まったく、性欲の権化みたいなご主人様を持つと苦労するわね、シュ



ン

「きゅ？」

意味がわからず首を傾げる愛らしいペットにもう一度微笑むと、メイド少女は着ていたエプロンドレスを脱ぎ始めた。

(お。ようやくびりびりが抜けてきたか)

長い正坐のせいで痺れまくっていた足がどうにか動かせるようになってきた。

(桐葉のやつ、まだ帰ってこないな)

ああいうときのあの幼なじみはまず間違はなくよからぬ企みをしてるといふ確信が栄春にはあった。伊達に人生の大半をとものに過ごしていない。もう少して完全に痺れも抜けそうだから追いかけてみるか、と考え始めたそのとき、幼なじみメイドが部屋に戻ってきた。

いや、正確に記すならば、幼なじみの少女はメイドではなくなっていたのだが。

「待たせたわね、お客様。さ、ご注文を言いなさい」

「……………なに、それ？」

桐葉が纏っていたのは、あの肌の露出度がむやみやたらと高いエプロンドレスではなく、さっきまで話題に出していた「PK」のウエイトレス服だった。

肌の露出面積という単純な比較ではメイド服に劣るものの、男心を鷲掴みする魔力はこちらも強烈なものがあった。

なにしろ、桐葉の策略によって深層意識にメイド属性を刷り込まれた栄春ですら思わず頭の中が真っ白（あるいはピンク）に染まったくらいである。

「見てわからない？ ウエイトレス様よ」

「ウエイトレスってのはわかるよ！ 様をつけるお前の神経はわからんが！」

「そうよね、お客様ごときにわかられても私のプライドが傷つくだけだもの」

「ウエイトレスに罵倒される客が傷つくのはかまわんのか！」

「だって栄春だもの」

「ひでえ！」

「でも誤解しないで。お客様を傷つけたりいびったりいじったり蹴ったりへこませていいのは世界で私だけだから」

「安心できるかっ！」

ウエイトレス服を着ても中身は完璧にいつもと同一だった。

客と店員という関係性が新鮮な分、地味に心に突き刺さる点については、栄春は敢えて無視を決めこむ。

「それよりお客様、とっととご注文選びやがりなさいな。ホント、グズなんだから。エッチはあんなに早いくせに」

「お、俺、早漏だったの!？」

自覚がなかっただけに本気で焦って聞き返すが、

「冗談に決まってるでしょ。なに泣きそうな顔してるのよ。私は充分過ぎるほど満足してるんだから気にする必要ないし、そもそもお客様以外のオチ×ポ啜えこむ予定は未来永劫ないから比較の意味も存在しないわ」

「男心はデリケートなんだから際どい冗談はやめて、マジで！ あと嬉し

いいこと言ってくれるのはいいけど、客相手に淫語はどうかと思うぞ、俺っ

「いいからさっさとご注文を選びなさいお客様。蹴るわよ?」

「なにこの高飛車かつ暴力的な店員!」

「メイドからウエイトレスにジョブチェンジしたからキャラも変えてみました」

「変わってないよ! 全然変わってないよ! ご主人様をお客様に変えただけじゃん! あと、選ぶもなにもメニューわかんないっての!」

「ああ、そうだったわね。じゃあ口で言うからちゃんとお聞きなさい。二度は言わないわよ」

「どんだけウエイトレス偉いって設定なの!」

「メニューは以下の三つよ。『A…エアチーズケーキと美人ウエイトレスのセット B…エアショコラケーキと美人ウエイトレスのセット C…エアロールケーキと美人ウエイトレスのセット』」

「なんか懐かしいぞ、この不条理な匂い漂いまくる選択肢! 美人はいいとして、エアってのは要するになんも用意してないってわけだな!」

「ちなみに時間切れだと隠れ選択肢の『D…エアギターと美人ウエイトレス』になるわ」

「もはやケーキですらねえ！」

本音を言うところとちょっとだけ桐葉のエアギターを見てみたかったが、そこまでやってるといつまで経っても事態が収拾しない。

「んじゃ……Aだ。チーズケーキ、好きだしな」

「まあ、どれ選んでもケーキなんて関係ないから同じなんだけどね」

「ぶっちゃけやがった！ こいつ、あっさりぶっちゃけやがった！」

わかってはいたものの、突っこまずにはいられない。それが榮春という人間の性である。

「そんなわけでエアケーキはこれでおしまい。残るは、メインディッシュの美人ウエイトレスよ。こっちはエアじゃないから、たっぷり味わってちようだい」

「ケーキのあとにメインディッシュって、なんか順番おかしくないか？」

「文句の多いお客様ね。何様のつもり？ まさかお客様のつもりなの？」

「……もう、どこから突っこんでいいものやら」

「そんなの決まってるでしょ。上か下のお口か、後ろの穴よ」

「……」

露骨すぎる返答に、さすがに言葉を失う。

「私のこの三つの穴を貫通開発調教したのはどこの誰だったかしら？」

「うう、俺ですごめんなさい」

「謝るくらいならとっとと押し倒したらどうなの？　なんのためにわざわざ

こんな手間暇かかる制服を縫ったと思ってるのよ」

「いや、普通はそんな目的のために縫わないぞ？」

「私の着る服は例外なく、あなたを誘惑するためよ」

ここまで言われて押し倒さないほど、栄春は我慢強い男ではなかった。

「桐葉……!!」

栄春は桐葉に抱きつくと同時にベッドに押し倒していた。

「あんっ、大胆ね。こういうの、嫌いじゃないけど」

「うっせえ。……いつの間にかこんな服を用意したんだよお前は」

「でも嬉しいでしょ？ お客様の大好きなウェイトレスを犯せるんだから」

「誤解を招くような発言すんなよ。それじゃまるで俺がとんでもない変質者みたいじゃねーか」

「とんでもない変質者じゃないの、まさに。いたいけな彼女に無理矢理コスプレさせて、力任せにベッドに引きずりこんで、穢れを知らない乙女の肉壺にそのいきり勃った剛直をぶちこもうとしてるんだから」

「いたいけな彼女は彼氏をガチで正坐させて尋問したりしないし、穢れを知らない乙女は肉壺とか剛直とか口走らん！」

「先走らん？」

「違う！」

「でもいっぱい先走り汁溢れてるじゃないの、お客様のオチ×ポ」

「うおっ、いつの間に脱がした!？」

間抜けな会話をしてるあいだにも桐葉の指は素早く栄春の下半身を裸に剥いていた。恐るべき早業である。

「こんなにはきはきにおっ勃てて、カウパーだらだらで、ホント、やる気

マンマンね」

遅しいイチモツを愛しげに撫でながら、栄春の頬や顎に舌を這わせてくる。生温かい舌の感触にぞくぞくしたものがこみ上げ、ペニスが急速に硬化していく。

「まったく、そんなにこの服がいいの？ 私という生涯契約の専属美少女メイドがいるのに、ウエイトレスのほうがいいの？」

「そ、そうじゃない、そうじゃないんだ」

また拗ねられると面倒だからと栄春は慌てて否定するものの、

「なにが違うのよ。こっちの栄春はいつも以上に硬いじゃないの。メイドが一番とか言っておきながらウエイトレスに発情しちゃって、ホント、淫獣ね」

剥き出しにされた若竿は桐葉の愛撫でマックスまで勃起してしまふ。

「いや、だってしかたないだろ!! 好きな女がこんな可愛い服着てんだ、欲情しない方が失礼ってもんだ!」

「あ、開き直った。あなた、困るとすぐ可愛いだの綺麗だの好きだの愛してるだの言うわね」



「人間、追い詰められると本音が出るんだよっ」

「本気汁？」

「どんな耳してんだお前！」

「ガマン汁も出てるけどね」

「あー、もう、少しは黙れっ」

このままだと埒が明かないと、強引に唇を奪い、そのまま舌を滑りこませる。

「んんっ……あむ、ん、ちゅ、くちゅ……ちゅ、ちゅぴ、ぺちゃ……」

さっきまで次々と言葉を紡いでいた桐葉の舌が、今度は栄春の口内で踊り始める。最初にキスを仕掛けたのはこちらだったはずなのに、ものの数秒で舌を押し返され、あっと言う間に主導権を奪われてしまった。

（くっ、こ、こいつのキス、相変わらすすっげえな！ 舌、根っこから引き千切られるんじゃない?!）

がちちりと頭を抱き寄せられ、唇ごと栄春の口の中にねじこんだ状態からさらに舌を強烈に啜られるのだ。唾液と一緒に魂まで吸われるようなこの感覚は何度キスを重ねても飽きることはない。むしろどんどん癖になっ

てしまうほどだ。

「じゅる、じゅるるっ、じゅじゅっ！」

（うおっ、やべ、意識まで吸われるっ！ たまらん！ だがせっかくのウエイトレス桐葉を堪能しなくてはもったいない！）

この恋人は気まぐれなので、次にまたウエイトレス服を着てくれる保証はない。下手をすると今回限りの可能性も否定できない。

（エロは一期一会！ 毎回全力投球！ 目で鼻で舌で耳で指で、そしてチ×ポで目の前のご馳走を堪能するのだ！ 行け、ファンネル！ 我が忠実なる愛の戦士たちよ！）

濃厚で強烈で情熱的なキスで栄春の頭も相当に茹だってるのだろう、自分でもよくわからないセリフを脳内で吐きながら、反撃を開始する。

ちなみにここで言うファンネルとは舌とか指とかペニスを指す。

まずは剥き出しの肩や腋への指によるタッチで桐葉の意識をキスから逸らす。

「ふみゅっ!？」

びくん、と跳ねたその一瞬の隙にキスを（後ろ髪を引かれつつ）振り払

い、うっすら汗ばんだ白い首筋へと唇を押しつけ、強く吸う。

「きゃうっ！」

再び痙攣したウェイトレスに体重をかけてその動きを封じると、今度はより積極的にそのすべすべの肌への愛撫を加速させる。

（こうして触ってみるとわかるけど、この制服、えらい露出だな。可愛いのにエロい。これ最強だろ。たまらん。マジたまらん！）

お前は俺のものだと宣言するように首筋や肩口にキスマークを次々とつけつつ、ウェイトレス服に守られていない二の腕や腋窩、肘の内側、胸元を指の腹で優しく、そして焦らすように撫でていく。

「うっ、あっ、ああっ、栄春、栄春……っ」

もっと別のところも触って欲しい、もっと強く愛撫して欲しいとねだるように、桐葉の両手が栄春の髪をくしゃくしゃと掻き回す。

栄春を「お客様」と呼べなくなっているのは、それだけ余裕もなくなっている証拠だ。

（相変わらず敏感だな、こいつ。そんな可愛い声聞かされたら、こっちだって我慢できなくなるだろうがっ）

本当はもっと焦らして焦らしてとろとろに蕩かして泣かせて啼かせて、その上でおねだりさせる算段だったが、初めてのウエイトレスコスプレに栄春も相当に昂ぶっていて、もう待てなかった。

どうやら最初からその気だったらしく、制服の胸元をずらしたり短いスカートを捲り上げると下着ではなく、いきなり乳房と秘所が現れた。

「桐葉はエロエロだな。乳首ぴんぴんだし、マン汁だらだらじゃんか。どっちもまだ指一本触れてないってのに」

ウエイトレス服の下から飛び出した豊かな乳房の先端では桜色の突起が激しく自己主張していたし、秘裂は早くも透明な蜜でてらてらと妖しく濡れ輝いていた。

「ああっ、ダメ……見ないで、バカ……っ」

ろくに愛撫もされてない状態でここまで発情してる女体を見られるのはさすがの桐葉でも恥ずかしいらしく、耳まで真っ赤に染めて羞じらっている。目尻には羞恥の涙も浮かんでいて、そんな姿がさらに栄春の獣欲に火を点ける。

「見るに決まってるだろ。こんな……こんな綺麗で可愛くてエロくて色っ

ぽい桐葉の姿、瞬きするのだって惜しいくらいだ」

長い黒髪と桃色に染まった透き通るような肌、そしてビビッドなピンクを基調としたウエイトレス服の見事な色彩に、栄春の目と意識が釘付けとなる。

「ヤダ、バカ、そんなにじろじろ見られたら……ううっ、恥ずかしいって言ってるのに……栄春のスケベ……変態……強姦魔……ッ」

涙に濡れた瞳がじっと栄春を睨みつけてくるが、桐葉は決して己の胸の膨らみや股間の茂みを隠さない。羞じらいを覚えると同時に、恋人の突き刺すような視線に女体を晒す愉悦を知っているからだ。

（た、たまらん……恥ずかしがりつつ気丈に俺を睨んでるのに、でも視姦される淫らな悦びに真っ赤に染まった若き女体……おおおっ、滾ってきた……ッ）

愚息は痛いくらいに勃起し、ぺちぺちと下腹に当たるほど反り返っていた。

「桐葉、挿れるぞ……っ」

肉棒の根元を握り、先端を桐葉の小さな膣口へと向ける。

「す、好きにすればいいわ。今の私はお客様に食べられるデザートなんだから……んん、あつ、ダメ、熱い……硬い……ッ」

ぱんぱんに膨れ上がった肉鉗で濡れた媚唇を数回上下に擦り鈴口に愛液をたっぷりまぶしたのち、栄春はゆっくりと桐葉の狭穴を押し割っていった。

(い、いつもよりキツイ……!)

初めてのウエイトレスプレイで興奮してたのは桐葉も同じだったらしく、ペニスに絡みついてくる膣肉の圧力が凄まじい。あまりに膣圧が強すぎて、腰で踏ん張らないと勃起が押し返されてしまうくらいだ。

ほとんどいじってなかったにもかかわらず柔褌は淫らに蕩け、一斉に男根に群がってくる。白濁し始めた恥汁が肉竿を伝い落ち、早くもシートに水溜まりを作る。

「ア、ア、アァ……来る、入って、来る……う……アア、太い……太いの  
お……栄春のオチン×ン、太くて硬いの……お！」

全方位から吸いついてくる極上の感触を味わいつつ、剛直を蜜壺に埋めていく。

栄春に串刺しにされた美しくも淫らなウエイトレスは背中を仰け反らせ、艶めかしい呻き声を洩らしながらその汗ばんだ肢体を震わせる。

「イイ、イイ……お客様チ×ポ、美味しくて気持ちイイ……はああっ、ダメ、腰、うねるっ……勝手にぐりぐりしちゃうの……ああっ、気持ちイイ……！」

若竿がすべて膣道に収まると同時に、桐葉の腰がペニスを軸に卑猥なサークルを描き始めた。

「ふううっ、イヤ、イヤ、恥ずかしいのに、あっ、あっ、動いちゃうの、栄春のオチ×ポよすぎて、腰、勝手に……アアッ、ダメ……こんなのダメ……え……ひいん!!」

発情ウエイトレスの円運動にシンクロするように栄春も腰を前後にピストンし、女体の最も深い場所、すなわち子宮を突く。

「やっ、やああっ、そ、それダメ、まだダメええっ！ ひっ、ひっ、響く、響くう！ ひゃめっ、お腹、びくびくするからあ！ アーッ！」

(すっげえな。どんだけ感じてるんだよこいつ)

もっとも、ちょっとでも油断すると栄春もいつ爆発しても不思議ないほ

どに昂ぶっている。勃起を包む媚壁は完全に蕩けきり、男の分身をホールドして新鮮な子種をせがんでくるのだ。

「ひいっ、ひっ、ひいイン！ き、もち、イイ……っ……あはっ、ああっ、感じ、ちゃう、オマ×コ、溶けちゃう……あひィ！」

桐葉からも余裕が消え、腰のくねる動きがどんどん激しく、そして淫らさを増していく。

屹立が蜜壺を攪拌するたびに泡立った本気汁がぐちゃぐちゃと卑猥な水音とともに周囲に飛び散り、二人の結合部を汚す。

「はうっ、ふっ、ウウーッ！ やっ、あっ、もっ、もう来るっ、あれが来ちゃうッ！ あっ、ダメ、ダメダメ、イイ、きも、ちいい……ヒイィッ!?」

急速に接近するオルガスムスに身悶えるウエイトレスが悲鳴じみた声を漏らしたのは、栄春がいきなり腋の下に顔面を潜らせたせいだ。

「な、なに……あっ、イヤ、やめて、舐めるのらめっ、腋はやめてっていつも言ってるゆ、のに……はひいいいンン！」

汗の甘い匂いを吸いこみながらすべすべの腋に唇を押しつけ、そして舌



をぬらぬらと這わせる。

「やっ、あっ、らめっ、腋ぺろぺろ、いやあっ！ あっ、あっ、来るのに、もうちょっとでイッチャウのにひいっ！」

腋責めの一番の魅力である羞じらいの反応を堪能しつつ、ピストンにも力をこめる。左右の腋を交互に舐め、亀頭で子宮を揺らすように膣道を扶る。

「ひっ、ひくっ、もっ、やっ、イク、イッひゃあ……ああっ、りやめ、イク、イクう……ひいひいッ！」

アクメ寸前まで追い詰められた若い女体が大きくその背中を湾曲させ始める。

ウエイトレス服から飛び出したたわわな乳房がゆさりと揺れ、翩られまくった白い腋からはさらに甘いフェロモンが漂う。

「えい、しゅっ、わ、わたひ、も、もう……アアッ、イク……イッチャ、かりゃあ……アッ、アッ、らめっ、オマ×コ、弾けひゃ……アアッ！！  
アッ、アアッ！！」

「ぐう……ッ！」



無数の膣壁が勃起を搾ると同時に、オーバーニーソックスに包まれた両脚が栄春の胴に巻きつく。降下していた子宮口が亀頭に濃厚なキスをした直後、栄春もまた、堪えに堪えていたザーメンを一気に解放した。

睾丸から迫り上がった大量の白濁汁が次々とウエイトレスの神聖なる子宮を汚していく征服感に、頭の中が真っ赤に染まる。

「ひっ、ひっ、ひっ、イグっ、出ひゃれながりゃ、またイグ……う！ はあああっ、イイツ、精子、イック……いひイ……!!」

灼熱のマグマに悶絶する桐葉を抱き締めたまま、栄春も最後の一滴まで恋人の蜜壺に子種を注ぎこむのだった。